都市祝祭における「オーセンティシティ」再考

—「YOSAKOI ソーラン祭り」参加集団の地域表象のリアリティをめぐって—

矢　島　妙　子

はじめに —— 都市人類学からみる「オーセンティシティ」

北海道札幌市の「YOSAKOI ソーラン祭り」は、高知の「よさこい祭り」を参考にして1992（平成４）年に始められた新しい都市祝祭である。数十人から百数十人の踊り子が１チームとなり、鳴子【図１】という楽器を持ち、アレンジした「ソーラン節」に合わせて路上や広場で踊る。鳴子を持つことと「ソーラン節」を取り入れるというルール以外、衣装などはすべて自由である。2002年の第11回には340チーム、約４万４千人の踊り子が参加した。観客動員数は200万人を超え、経済効果も200億円を超すといわれる。旅行会社によってはこの祭りを見るためのツアーもある。「YOSAKOI ソーラン祭り」の参加集団はそれぞれのチームのオリジナリティを表現しようとする。その際に多く用いられるのが地域性の表出である。

都市社会には自他性があり、相互主観性がある。自己主張だけでは成り立たない。それゆえに、都市で表現されるものはイメージや、ときには婉曲的表現のも

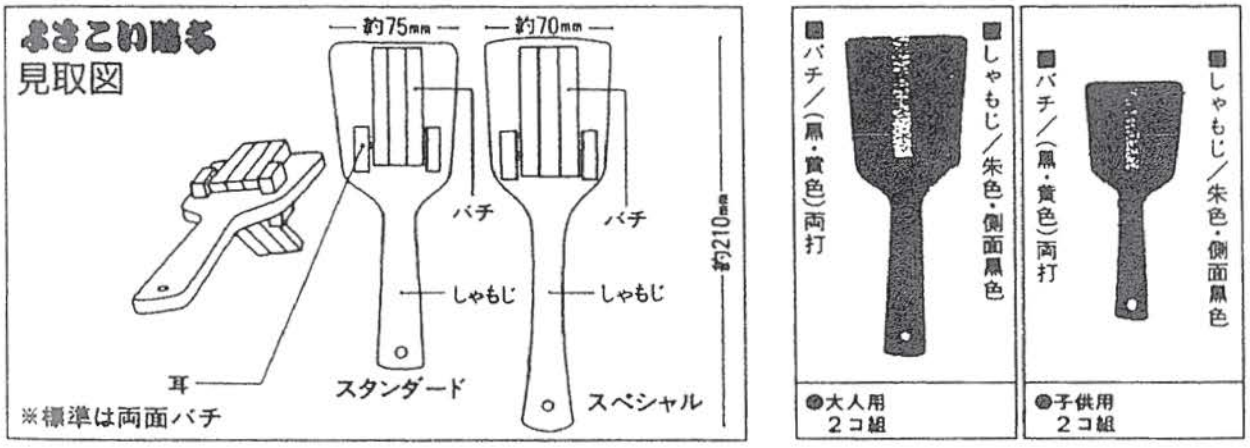


図１　鳴子のかたち（製造所リーフレットによる）

のもある。実物そのものでは強すぎるために、「らしさ」が求められることがあるのは事実である。従来、観光人類学においては、「オーセンティシティ（authenticity)」の追求が当然のことと論じられてきた。「オーセンティシティ」とは「本物性」「真正性」「本物らしさ」をいう。

しかしながら、イメージや「らしさ」だけで人々は心的充足を得られるのだろうか。都市には居住する人がいる。都市の祭りにおいては、観客は観光客だけでなく、そこに居住する人、また祭りの参加者も観客となる。「ミル人」／「スル人」や「ゲスト」／「ホスト」という単純な二項対立的関係ではとらえきれない多様性をもつ。ここに外部の人間だけを観客の対象とした従来の観光人類学の考えを都市人類学のとらえ方に引き戻す必要があると考える。つまり、「本物らしさ」などではなく、もっと実体に迫るベクトルで、都市住民の動態を掘り起こす必要があるのである。

本稿では、祭りの参加集団とその参加集団が属する地域社会との結びつきに深く注目したい。具体的には、札幌市豊平区のチームと札幌市以外の地方、三石町（みついしちょう）のチームを取り上げる。前者は大賞受賞回数が１番多いチームであり、後者は2002年に初めて札幌市以外の地方のチームとして大賞を受賞したチームである。この２チームの対比から、踊りのオリジナリティとして表出される地域性がその地の歴史や生活背景とどう結びついているのかについて考察したい。つまり、都市において表象が生活のリアルな実践をどう反映しているのかを問うのである。

地図　札幌市と三石町の位置

1.「YOSAKOIソーラン祭り」における札幌市のチームの地域表象

「YOSAKOIソーラン祭り」の踊りは「ソーラン節」を取り入れるというルールがある。「ソーラン節」は掛け声だけで、ほとんど地域性を表出しないチームもあるが、多くのチームは、波を表したり、網を投げたり引いたりする振り付けで漁業性を表す。内陸部である札幌市のチームも漁場ではないのに漁業性を表現することが多い。「札幌市」の地域性の表出は非常に困難であり、札幌という都市の生活者が‘地域性’として表現するのは、往々にして、札幌という地域ではなく「北海道」であり、また「漁業（ニシン漁）」というイメージである。

(1)「平岸天神（ひらぎしてんじん）」

札幌市豊平区平岸に所在する。「ひらぎし」はアイヌ語の「ピラ・ケシ・イ」(崖のはずれ）からきているという。明治4年（1871）年に岩手県から65戸（62戸の説もある)、203人が入植し、開拓された土地である。明治初期に開拓使からリンゴの苗木を配付されたのをきっかけにしてリンゴの栽培が盛んになり、昭和11（1936）年頃には「平岸リンゴ」「札幌リンゴ」としてシンガポールに輸出されるようにもなったが、宅地化の進行や道路整備などにより昭和46（1971）年の地下鉄開通の頃にはリンゴ園は姿を消した。現在は住宅地、商業地である。豊平区の人口は約20万人で、このうち平岸地区の人口は約2万人である。

第1回の「YOSAKOIソーラン祭り」を開催するにあたり、手本として高知の「セントラルグループ」というチームが参加した。その踊りに触発されて1993年に結成されたのが「平岸天神」である。この地には、従来、平岸天神中央商店街振興組合を支持母胎とする「平岸天神太鼓」があり、それに続く郷土芸能として「平岸天神ソーラン保存会」をつくった。4つのS、スピード・シャープ・ストロング・スマイルを踊りの基本としている。

1993年、第2回「YOSAKOIソーラン祭り」に初参加・「ヨイヤサ賞」[1]、1994年（第3回）大賞、1995年（第4回）大賞、1996年（第5回）準大賞、1997年（第6回）準大賞、1998年（第7回）大賞、1999年（第8回）大賞、2001年（第10回）高知県知事賞〔第5位〕、2002年（第11回）準大賞の受賞歴がある[2]。踊り

子数140名、全体の年齢は17～40歳、平均年齢26歳、男女比は３対７である。参加費は１万８千円で、高校生以上という条件があるが、踊りのレベルが相当に高く、平岸居住者も敬遠してしまうようなチームである。当初は平岸地区の人が多かったが、現在は平岸地区の踊り子の方が少ないそうである。1999年には小学生対象の「平岸天神ジュニア」も誕生した。踊りの振り付けは1998年まではプロに頼っていたが、1999年からは自分たちで創作している。曲はプロの業者に依頼する。鳴子はオーソドックスな鳴子である。毎年、漁業性に強く固執し、ニシン漁の大漁を願い、喜ぶ漁師（ヤン衆）の姿の表現する。１枚１枚柄の違う長半纏（漁師の衣服は少しでも他者と違うものにすることから）[3]を着て、地方車（じかたしゃ：音響機材を搭載して装飾を凝らしたトラック）でも波を表す。地方車にはこの他に、天神太鼓も搭載する【写真①②】。

(2) 「平岸天神」に対する観客の反応

人気チームで、このチームが出場すると観客の拍手も一段と多くなる。しかし、2002年の「YOSAKOIソーラン祭り」では観客に今までにない変化がみられた。この年、踊りが始まるに際し、長い前口上があった。それは次のようなものであった。

「昔はよかったなぁ。春になるとよ、浜がニシンであふれかえったもんだ。真っ黒に日焼けしたヤン衆の威勢のええかけ声が聞こえてくりゃ、今日も大漁だでぇ……。」

これに対して観客に明らかな反応がみられた。

① 「え？平岸の‘昔’はリンゴだろう。」（大通公園西８丁目／メインステージ：男性、これに対してうなずく周りの数名）

② 「あんな細い身体で、あんな細い腕で、漁ができる訳がない。もともと説得力がない。」

③ 「余計なことは言わない方がよかったのに。」

④ 「あのセリフは野暮ったい感じがした。」

（②～④は祭り終了後の感想で、実際の漁場のチームの人々：男女）

⑤ 「『昔はよかった』って、まるで大賞をたくさんとっていた『平岸天神』の昔を懐かしんでいるみたいだ。」（平岸会場：男性）

イメージとしての漁業という許容範囲を超えてしまった、今までにない明らかな‘言葉’として発せられたメッセージに観客は違和感を覚えたと考えられる。

①「平岸天神」の踊り（2002年、於：平岸会場）

②「平岸天神」の地方車

2.「YOSAKOI ソーラン祭り」における札幌市以外の地方のチームの地域表象

札幌市以外の地方のチームも札幌市と同様に、漁場ではないのに漁業性を表すこともあれば、別のもので地域表象をすることもある。例えば、士別市のあるチームはこの地に牧羊の農場があるということでヒツジ型鳴子を使用する[4]。網走市のチームは市内の水族館にクリオネがいるということでクリオネ型鳴子を使用する。この鳴子は網走刑務所の受刑者が製作したものだそうである[5]。北見市のチームはこの地域が薄荷の産地ということで薄荷の色で薄荷の香りをしみ込ませた衣装で踊る[6]。石狩市のチームは鮭の一生を踊りで表現し、鮭の絵のついた法被や編笠を身につけ、イクラ／稚魚／成魚／ほっちゃれ（産卵のために川に戻ったメス）に分かれて踊る[7]。これらはほんの一例であり、札幌市以外の地方のチームの地域表象は多様で豊かである。

2002年、第11回「YOSAKOI ソーラン祭り」の大賞受賞チームは初めて札幌市以外の地方のチームであった。それが次にあげる「三石なるこ会（みついしなるこかい）」である。

(1)「三石なるこ会（みついしなるこかい）」

北海道三石郡三石町に所在する。「みついし」はアイヌ語の「ピットウシ」（小石の多い土地）からきているという。天明6（1786）年に阿部屋伝七が三石場所[8]の請負人となって漁業を営んだ。当時は、戸数30余、人口140余人であった。その後、場所制度が廃止されるが、後を継いだ（二代目）小林重吉[9]が、「小林屋」と名乗り、本州に魚や昆布を送る商売を始めた。明治の初期から中期にかけて、徳島、兵庫、岩手、福井の入植者が農業を、また、新潟からの入植者が漁業を始めた。明治39（1906）年に三石村となり、その後、昭和26（1951）年に三石町となる。現在の人口は約5千人で漁業・牧畜・農業が主な産業である。特に昆布（学名「ミツイシコンブ」）と軽種馬（競争馬：オグリキャップ、ハクタイセイ、アグネスフローラなど）で有名な土地である。

従来の三石の郷土芸能としては、淡路地方からの入植者による「淡路おどり」（豊穣を願う踊り）、岩手県からの入植者による「南部盆おどり」（年貢米を納め

られず、代わりに使役労働を行ったが、その労働の苦しさの憂さ晴らしとして踊られたのが始まりといわれる)、福井県からの入植者による「越前おどり」(開拓の苦難の中で故郷を偲んだ踊り)、また、「三石獅子舞」がある。「三石獅子舞」は当初、各地区の入植者の出身地の各々の方式により祭典に奉仕していたが、都合によっては中断することもあった。昭和10年有志が復活に志し、昭和12年から水産青年団が祭典行事とした。その後、新潟県出身者によって今日の獅子舞の基礎が確立された。

このような郷土芸能も一部の人のみのもので、特に地元で最も歴史があり規模も大きい三石神社の秋祭りがだんだん寂しくなってきた。そのために、誰でも参加できる何かを創りたいとの希望から、テレビで「YOSAKOIソーラン祭り」の映像を見た代表、酒井珠己子（さかい しゅみこ）さんが中心となって、1993年発足したのが「三石なるこ会」である。札幌以外の地方のチームとしては最初の参加チームとなった。

1994年、第3回「YOSAKOIソーラン祭り」に初参加・北海道高知県人会会長賞、1995年（第4回）積丹町賞、1996年（第5回）ベストドレッサー賞、1997年（第6回）準大賞、1998年（第7回）優秀賞、1999年（第8回）準大賞、2001年（第10回）札幌市長賞〔第4位〕、2002年（第11回）大賞の受賞歴がある。

現在のチームの人数138名、年齢は11～73歳、平均年齢45歳、男女比は1対9（踊り子は全員女性、男性はスタッフ）である。役員の配偶者（男性、5人）が「鴛鴦隊」（おしどりたい）として協力する。入るに際しての条件は中学生以上（親と一緒の場合のみ小学生も可）である。主婦と社会人が多く、中学生・高校生は約20人である。役員として、会長、副会長、鴛鴦隊、事務局長、会計（全部で16人）をおく。任期は1年で再任もある。当初は三石町の人のみだったが、江別市（札幌市に隣接）の知り合いに声をかけたのがきっかけで、現在は江別市や札幌市の踊り子も35人（江別28人、札幌7人）いる。代表は江別市まで週2回通って踊りを教えている[10]。三石町の踊り子は圧倒的に主婦が多いためにどうしても家庭の事情などでやめていく人もいるが、全体のうち三石町の踊り子が半数を切ったらチームの存続は考えていないと代表はいう。「YOSAKOIソーラン祭り」に参加し、受賞チームの常連となり、それまでは札幌ではあまり知られていなかった「三石町」の知名度をあげることとなった。

踊りの特徴は漁業性、浜の女性の力強さを表現する。網を引く仕種は毎年必ず入れ、揺れる昆布、法被を脱いで回すなどの仕種が見られる。踊り子の身体は筋肉がたくましく、それは漁業をはじめとした労働をしている人の身体である。踊りは年ごとにテーマを決めている。1994年「ソーラン節」、1995年「サラブレッドのふるさと」、1996年「大漁 ── 浜の勇ましさ」、1997年「大漁 ── 浜の男の勇ましさと海」、1998年「大漁 ── 浜のかあちゃん達の明るさ」、1999年「大漁 ── 浜の女の昼と夜の顔」、2000年「YOSAKOI ソーラン祭り」、2001年「三石の四季」、2002年「Peace & Love」[11] である。参加費は、年会費3千円、衣装のクリーニング代が年間3千円、ケガなどに対処するための保険料5百円の計6千5百円である。運営費は700～800万円でスポンサーはつかないが、後援会や町の応援団からの援助がある。衣装は自分たちで大漁旗を利用して作ったリバーシブル（片方は濃紺で、'みついし' の白い文字が入る）の法被である。踊りの振り付けは自分たちで創作したものを東京のプロにみてもらって仕上げる。曲は東京のプロの業者に依頼する。鳴子はオーソドックスな鳴子である。地方車にも船を使用している。この船は船大工に依頼した本物の船で、中に鉄材も入っており、外して海に浮かべれば浮かぶものである【写真③④】。地方のチームとして初めて誕生したチームであったために手本にしたいとの要望が多く、当初は道内のイベントに年30回ほど遠征していたが、イベントの多い夏はちょうど昆布漁の忙しい時期で、今では遠征は年5回ほどである。

(2) 「三石なるこ会」に対する観客の反応

1994年の第3回「YOSAKOI ソーラン祭り」に初出場したときは、平均年齢が高い女性の集団に、冷やかな眼差しも感じられたそうであるが、回を重ねるにつれ、そのファンも増えている。観客の反応には次のようなものがある。

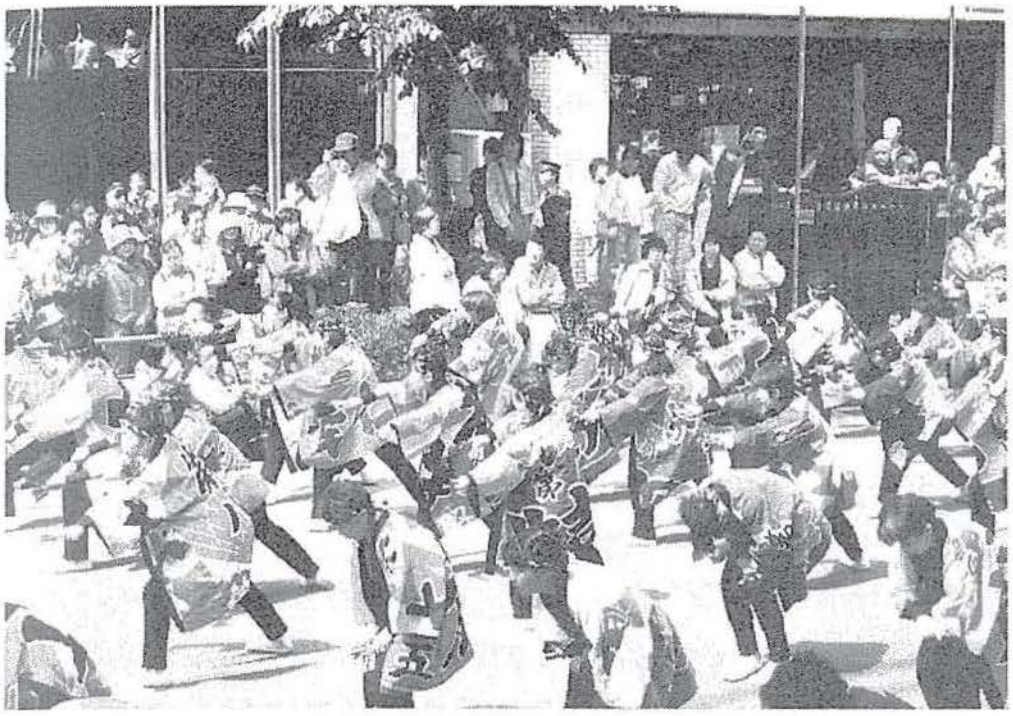
① 「あっ、三石だ。」「三石が来たぞ。」（大通パレード北コース桟敷席、ならびに向かい沿道の人々：男女）

② 「もうすぐ三石よ。これを見てから帰りましょう。」（大通パレード北コース桟敷席：女性）

③ 「よっ、みついし！」（大通公園西8丁目／メインステージ：男性、「三石なるこ会」の代表によると毎年、このように声をかけてくれる男性がいると

いう)。

このような観客の反応から「三石なるこ会」が観客に「待たれている」存在であることがわかる。



③「三石なるこ会」の踊り（2002年、於：大通パレード北コース）

④「三石なるこ会」の地方車

3．考察

「平岸天神」の前口上はその本当の地域性を意識させてしまう（地域性を問う）明らかな言葉として発せられたメッセージであり、それはこれまで許容されていた範囲を超えてしまい、その結果、観客は違和感を感じたと考えられる。身体表現だけでなく言語化された表現内容はその真偽が問われることとなったのである。

一方、「三石なるこ会」の踊りは、その日常をもとにした確かな生活感覚から作られている。実際に網を投げ、引き、毎日浜風を身体に受けている人々が作った踊りで、実体験に基づいている。それは「本物」であり、観客も納得しているのである。「平岸の踊り子は‘線’に見える。三石の踊り子は‘丸’に見える」という意見がある。三石の踊り子の筋肉は観客にとっても間違いなく納得できるリアリティなのである。演者のリアリティと観客のリアリティが共感しているのである。

おわりに――「オーセンティシティ」より「リアリティ」

「YOSAKOIソーラン祭り」においては、オーセンティシティ（本物らしさ）が権威を持つのではない。イメージで漁業性を表現しても構わないのである。踊りそのものを競っており、より本物らしく装っているから人々の評価が高いという訳ではない。「平岸天神」の人気は「漁師らしさ」の表現が素晴らしいからではなく、踊りのがレベルが高かったからなのである。

都市は「本物」そのままの表現ではなく、イメージであったり、それを婉曲的に表現したりしても構わない。100パーセントの「本物」を都市に持ち込む必要はないし、それは困難であることが多い。ある程度の洗練度が求められ、多様性があるのが都市だからである。振り付け、曲、衣装、地方車はプロの手に任せても構わない。商業地であり、専門家がいる都市においては、プロの手に頼っても構わない。それは許容範囲なのである。

しかし、「らしさ」すらも求められていない、イメージでもいい祭りだからといって、「本物」が無意味というのではまったくないのである。重要なのは、イ

メージだけでいい、あるいは「らしさ」だけでいいとするのではなく、やはり「本物」の方に向かおうとする「方向性」なのである。「本物」はイメージよりはるかに強く確実に人々に受け入れられ、承認されている。人々が本当に納得し、心的充足を得られるのは、オーセンティシティ（本物らしさ）よりもリアリティ（実体）なのである。振り付けなどはプロの手に任せても、踊り子だけは地の素人である。チームの中にはジャズダンススタジオのチームもあるが、踊り子はうまく踊れるのが当たり前であって、観客はあまり感動していない。「普通の人々」が踊るというこの祭りの持つ本質――「誰もが参加できる」というのはある種のリアリティであり、これだけはどうしても譲れないのである。村落では祭りにおいて、リアルなものを離れてヴァーチャルな世界に浸る傾向がある。逆に、日常がヴァーチャルなものであふれている都市では、祭りという非日常の場面においてはリアルなものが希求される。実感できるもの、自己実現できるもの、確かな身体感覚が必要なのである。日常にないものを取り戻すのが祭りなのである。

本誌前号（31号）において、筆者は、「YOSAKOIソーラン祭り」における参加集団の分類と特徴にみる都市性と継承性について論じた。その中で、地域密着型チームの事例のひとつとして札幌市北区の新琴似（しんことに）の「新琴似天舞龍神（しんことにてんぶりゅうじん）」というチームを取り上げた。新琴似という地は屯田兵が開拓した土地で、このチームは開拓の精神を表現する。札幌市内だけでなく道内道外にもこのチームのファンは多い。踊り子は屯田兵の子孫という訳ではないが、この地は屯田兵が開拓した土地というのは事実であり、その事実を地域表象の拠り所とする姿勢にはまさに「本物・リアリティ」を求めようとする「方向性」があり、そのことが人々をひきつける集団としてのエネルギーとなっていると考えられる。

「YOSAKOIソーラン祭り」は新しい民俗であり、地域の歴史や生活背景とは無関係に創造されているように思われがちだが、三石町や新琴似の例からもわかるように、新しい民俗の創造には実際の生活が強い基盤となっている。地域に根ざした生活の営みの上に新しい民俗は創造され、それは「本物」であるがゆえに、揺るぎない強さをもっているのである。都市研究の民俗学や人類学も、「本物らしさ」だけでよしとする方向ではなく、生活の実践に結びうるリアリティをすくい上げていかなければならないと考えるのである。

<付記>

本稿は日本民俗学会第54回年会において個人発表したものをもとに加筆・修正してまとめたものである。

また、本稿をまとめるにあたり、「三石なるこ会」の皆様（代表、酒井珠己子さん）にご協力をいただきました。ここに厚くお礼を申し上げます。

<注>

(1) 「ヨイヤサ」とは高知の「よさこい祭り」における踊りの掛け声で、「YOSAKOI ソーラン祭り」が始まった当初にあった賞である。賞の種類は毎年変わり、現在ではこの賞はない。

(2) 2000年第9回には会場で爆発事件が起こり、その影響でコンテストは中止された。

(3) 漁師の仕事は危険度が高く、海難事故の場合、人相が変わってしまい、人の判別がつきにくくなるために、少しでも特徴のある衣服を身につけるということである。この1枚1枚柄の違う長半纏の意味については、2001年、第3回「にっぽんど真ん中祭り」（名古屋）に遠征参加した「平岸天神の」チームの代表から祭りの司会者が聞いた話としてステージで紹介したものである。この長半纏は「平岸天神ソーラン保存会」の理事長の夫人が縫ったものである。

(4) 「夜咲恋そぅらんサムライ士別 with 三好フージャーズ（よさこいそーらんさむらいしべつうぃずみよしふーじゃーず）」というチームである。

(5) 「yosakoi ソーランあみばしり」というチームである。鳴子の色・形は本文図1のようなオーソドックスなものから、衣装の色に合わせたもの、また、士別市や網走市の例のように、地域性が表されたものやチームの個性を強調するために大幅に形を変えたもの（例えば、柄を切り詰めて手の甲に固定する手甲型）など多種多様である。

(6) 「薄荷童子（はっかどうじ）」というチームである。

(7) 「石狩流星海（いしかりりゅうせいかい）」というチームである。

(8) 「場所」とは松前藩とアイヌの交易の場をいう。本州からの米やたばことアイヌの魚や昆布などが交換された。

(9) 「小林重吉」という名は三代続いた。

(10) 札幌市ではチーム数が多く、練習する場所がなかなかとれないために江別市で行うそうである。

(11) 2001年9月に起きたアメリカの同時多発テロ事件に対してのメッセージである。

＜参考文献＞

・安藤直子 2001「観光人類学におけるホスト側の『オーセンティシティ』の多様性について ── 岩手県盛岡市の『チャグチャグ馬コ』と『さんさ踊り』を事例として ──」『民族学研究』66(3)：344-365

・有末　賢／内田忠賢／倉石忠彦／小林忠雄編 2002『都市民俗の生成』（都市民俗生活誌第１巻）明石書店

・橋本和也 1999『観光人類学の戦略 ── 文化の売り方・売られ方 ──』世界思想社

・──── 2001「観光研究の再考と展望 ── フィジーの観光開発の現場から ──」『民族学研究』66(1)：51-67

・川森博司 2001「現代日本における観光と地域社会 ── ふるさと観光の担い手たち」『民族学研究』66(1)：68-86

・三石町史編纂委員会編 1992『追補　三石町史』北海道三石町

・スミス,V.L.／三村浩史監訳 1991『観光・リゾート開発の人類学 ── ホスト＆ゲスト論でみる地域文化の対応 ──』勁草書房

・豊平区役所市民部総務企画課公聴係編 2002『豊平区の歴史』札幌市豊平区

・和崎春日 1996『大文字の都市人類学的研究』刀水書房

・矢島妙子 2000「『よさこい祭り』の地域的展開 ── その予備的考察」『常民文化』23号　成城大学常民文化研究会

・──── 2000「祭り『よさこい』の誕生 ──『感動』した旅人たち」『現代風俗学研究』６号　現代風俗学研究会

・──── 2000「祝祭の受容と展開 ──『YOSAKOI ソーラン祭り』」日本生活学会編『祝祭の100年』ドメス出版

・──── 2001「『よさこい』の祭りにみる地域性についての人類学的一考察」『常民文化』24号　成城大学常民文化研究会

・──── 2002「祝祭の組織編成にみる都市性と継承性 ──『YOSAKOI ソーラン祭り』における参加集団の分類と特徴」『名古屋大学人文科学研究』31号　名古屋大学大学院文学研究科

・──── 2002「札幌市北区新琴似の生活文化の創造過程 ──『YOSAKOI ソーラン祭り』の地域密着型参加集団の歴史・社会背景」『生活学論叢』７号　日本生活学会

・山下晋司 1996『観光人類学』新曜社

・──── 1999『バリ　観光人類学のレッスン』東京大学出版会

・米山俊直 1986『都市と祭りの人類学』河出書房新社

<参考資料>

・北海道三石町編 2001『北海道三石町　町勢要覧2001』北海道三石町
・三石町企画課広報統計係編 2002『2002 町勢要覧資料編』三石町企画課広報統計係
・YOSAKOI ソーラン祭り組織委員会監修 2002『北海道ウォーカー2002年 №13 別冊付録 YOSAKOI ソーラン祭り会場&チーム全ガイド』角川書店
・YOSAKOI ソーラン祭り組織委員会監修 2002『よさこいタイムス2002』あるた出版

（やじま　たえこ　文化人類学）